

銃剣道授業採用をめざして

平成 25 年度中学校武道授業（銃剣道）指導法研究事業



平成 25 年度中学校武道授業（銃剣道）指導法研究事業〔主催＝（公財）日本武道館・（公社）全日本銃剣道連盟・日本武道協議会、後援＝文部科学省、協力＝勝浦市立北中学校〕が平成 25 年 12 月 20 日～22 日の 3 日間、千葉県・勝浦市の日本武道館研修センターにおいて開催された。

本年度新たに短剣道の指導法についても研究・協議なされた。

■1 日目（12 月 20 日）

開講式

開講式では、主催者を代表して、鈴木健全日本銃剣道連盟副会長兼専務理事が現在、全国で銃剣道採用が 0 という事実にあれ、「実施されていなくとも銃剣道授業採用に向けてできることはあります。そのため、実際に、教育現場で指導されている先生方の意見が大切です。また、本年は短剣道の授業導入の可能性も探りたいと考えています」と挨拶。

続いて、三藤芳生日本武道館理事・事務局長が、「最新の各当道府県教育委員会に対する日本武道館必修化アンケートでは選択武道の多様化が進んでいることが読み取れます。銃剣道にも必ずチャンスがあります」と挨拶を行った。

○研究者打合せ・指導法検討①

初めに衛藤敬輔全日本銃剣道連盟事業部次長より、銃剣道授業の指導案が提示され、明日の模擬授業の確認・検討、単元構造図案の精査、また、短剣道の授業の可能性を本研究事業で確定に向けての協議を行いたいとの説明がなされた。

明日の模擬授業では、時間の都合上、1 年生の 3, 4, 5 時間目、2 年生の 2, 3, 4, 5 時間目を実施する。銃剣道授業の指導案は、昨年度までの反省点も踏ま

えており、技名を視覚的にも印象づけたいため板書を行うこと、事前に教員が打つ所・打たせる所に赤と青のテープを貼ること等各研究者間で実演も踏まえ綿密に意見交換なされ、動作・文言の精査・確認が行われた。



■2 日目（12 月 21 日）

○研究事業①

模擬授業は、勝浦市立北中学校野球部の男子生徒 11 名の協力を得て、滝沢元気研究者が外部指導者、丹下隆之研究者が保健体育科教員という想定で行われた。

昨日の指導法検討のとおり「送り足」・「開き足」を板書し、視覚的にも技名を印象づけた。次に「木銃」も板書され、持ち方の指導がなされ、昨日の打合せ通り、打つ所、受ける所など木銃の各部位には色テープが巻かれ判り易くなっていた。「構え」「直れ」の号令のもと「1, 2」との発声に合わせ、それぞれの動作を 2 挙動で行う。生徒たちは「直れ」で右足を前に引くことに戸惑っていたようだ。

次は「直突」の指導。相手の突きを手のひらで受けて体感すると、生徒たちは高揚し笑顔がこぼれていた。この指導後、俄然、生徒たちは銃剣道授業に没頭していった様子であった。木銃を抜く指導では、攻め（木銃を抜く）、守り（抜かれる木銃を手でつ

かむ)に分かれ、攻防のゲームが行われ、ゲームの楽しさも加わり、抜く挙動を生徒たちは一生懸命行っていた。次に目標物を突く(ボールを突く)指導に移った。木銃が上を向いたり、木銃でボールを叩いたりしないよう、また、木銃を正しく突くことが目標であるので、おもいやりを持ってボールを投げるよう丹下研究者より注意点が付け加えられた。

午前中の最後は相手と向き合っの直突の練習(基本の交差)となった。続いて「突き」、「同じ」「同じ」の元立ちの発声で3回連続突く練習。順番を覚えることが大切であることが付け加えられ、直突の発表会を行った。大きな声でお互いが声を掛け合うことができてよかったとの丹下研究者からの感想があり、午前中の実技が終了となった。



午後の実技は、授業者を滝沢研究者とし、ユーモアにあふれた滝沢研究者の自己紹介からスタートとなった。滝沢研究者が「午後の最終目標は相手の突きを払って(くずして)突きを行うことです。木銃先端の赤いテープは相手の木銃を払う方、黄色いテープは払われる方の部位です」と説明し、払う側、払われる側、確認役の3人組になり実習した。教員役の研究者から確認役は払った者の右手が下がっていないか、的確に部位を打っているか確認してほしいと指導。払う側は木銃を止められなかったり、突く側もまっすぐ突けなかったりと難しそうであった。生徒たちの集中力が切れたと見ると、滝沢研究者より注意が飛び、生徒たちは気を持ち直して、今回の最終内容である基本交差・反対交差での「相手の突きを払って(くずして)突き」の練習を行った。終了後、「一生懸命取り組んでくれました。これを機にまたどこかで銃剣道もしくは武道にふれてもらいたいです」と滝沢研究者から発言があり模擬授業の終了となった。

○指導法研究協議

研究事業を終え、指導法案に基づき、授業用銃剣道の形研究が行われた。研究者から活発な意見が飛び交い、教本内の銃剣道形頁はより見やすいレイアウトとなった。

次に研究者による本日の研究事業を踏まえ指導法の検討に入った。指導案はより精度を高めほぼ完成となった。

■3日目(12月22日)

○指導法研究協議

丹下研究者が作成した単元構造図案を各研究者によって精査・確認がなされた。「理法」をすべて「理合」に統一する。評価基準例の検討では、「運動技能」の評価基準において、「理合」の文言は、「知識・理解」の評価基準に移す等が話し合われた。

続いて、短剣道授業の可能性が協議された。衛藤氏より、銃剣道の指導案をそのまま応用することを考えており今後連盟内でも検討・協議を重ねていきたいとの説明があった。

次に銃剣道授業採用に向けた報告として、衛藤氏より埼玉入間の中学校では総合学習の時間で銃剣道を体験させている学校があるとの報告があった。また、菊池聡研究者より、当人が務めている岩手県岩泉町立小本中学校では、昨年度、校長に銃剣道授業採用にむけてよい返事をもらい、町教育委員会からも良好な回答を得た、しかし、県教育委員会から柔道・剣道を行うよう指示があり不採用となったとの報告があった。

最後に衛藤氏より、来年度、日本武道館と共催の第1回全国銃剣道指導者研修会が行われる、銃剣道授業採用に向け、是非初心者教職員中心に募集をかけたいと力強く発言があった。

○閉講式

閉講式では、研究者を代表して菊池研究者が、講評を述べ、3日間の全日程が終了した。

◇研究者

滝沢 元気(新潟県立三条商業高等学校 教諭)

石川 慎也(尽誠学園高等学校教諭)

丹下 隆之(愛媛県立東温高等学校教諭)

菊池 聡(岩手県岩泉町立小本中学校教諭)

◇連盟事務局

鈴木 健(全日本銃剣道連盟副会長兼専務理事)

衛藤 敬輔(全日本銃剣道連盟事業部次長)

◇日本武道館事務局 2名 (順不同・敬称略)